

小田原教育

第125号

平成28年10月21日

アキアカネ



ナツアカネ



アキアカネはナツアカネよりも先に羽化し暑さをしのぐために山にのぼります。秋になると、平地へおりてきて、水田やプールに卵を産みます。

ナツアカネは、山には行かないので夏によく低地で見かけます。

目 次

巻頭言	2
教育研究所長 柳下 正祐	
1 小さなころみ	3
「道徳の教科化に伴う指導法と評価に関する研究」	
早川小学校総括教諭 物部 典彦	
2 ある教室から	4
教育指導課指導主事 堀田 亜衣	
3 研究所だより	
① 学習指導法研修会	5
② 初任者研修会	6
③ 教育講演会	7
④ マナーアップ研修会	8
⑤ 今後の教育研究所事業	8



万象具徳 先人の教え

教育研究所長 柳下 正祐



この二宮尊徳先生の木象嵌は、昭和 52 年に小田原市内の各学校に送られたものです。



作者はこの道一筋 70 年、小田原市南町にお住まいだった内田定次さんです。内田さんは、木象嵌作りの名人として、その腕前を日本はもとより広く海外でも認められた方でした。

縁あって、私は内田さんと何度かお会いし、木象嵌の話や子供の頃の話などを伺う中で、仕事にかける真摯な態度、熱意、職人魂に心を惹かれていきました。

小学校の高等科を卒業した内田さんは、その頃の多くの子供達がそうだったように、中学校への進学をあきらめ、仕事を見つけなくてはなりません。色々な体験や多くの関わりの中から内田さんは、自分を生かす道は図画・工作だと考え、大好きな絵と物作りを生かした木象嵌の道に進もうと決心したそうです。しかし、仕事に就くと仲間がどんどん上達していくのを見て、悔しくて悔しくて、辞めてしまおうと何度も何度も思ったそうですが、その度に『仲間と比べることはやめよう。自分の特技が生かせるこの道で頑張ろう』と、自分に言い聞かせ、自分を信じて修行に励み努力を重ねていったそうです。そして、何年も何年もかけて腕を磨いていったのです。

内田さんは、私にこう話をされました。

『自分は、決して器用な方ではないが、この仕事で自分を生かす道だと思った。だからこそ、自分に納得のできる作品を作ろうと、精一杯取り組んでいる。鋸も小刀も道具は全て自分で作る。良い作品を作るには、とことんこだわることだ。木象嵌を作っている時が本当の自分の姿だ。』

この作品は、内田さんが 57 歳全盛期の作品です。

内田さんが最も仕事に油が乗っていた時期に、なぜ尊徳先生の作品を作り各学校に寄贈してくださったのか。私はこう思うのです。

一つは、『万象具徳』、二宮尊徳先生の教えです。この世の全ての人やもの（万象）は、それぞれが独自のよさ・力（徳）を身につけている。その徳を互いに認め合い、磨き、磨き合い高め合って、よりよい生活、よりよい人生、よりよい社会を築いていこうというものです。尊徳先生を尊敬していた内田さんの職人人生は、正に万象具徳を貫いた生き方だったと思います。内田さんが持っている絵や物作りの力（徳）を生かし、木象嵌作りの名人となった内田さんの尊徳先生への感謝の気持ちの表れだと思います。

もう一つは、小田原の子供達に、内田さんのように人やもの、様々な出来事との関わりを大切にして、それぞれ歩む道は違っても一人一人が持つ徳を磨いて充実した人生を送ってほしいという願いがあったのだと思うのです。

尊徳先生の教えと内田さんの生き方に感銘を覚えると共に、子供達が自ら徳を磨き高める支えとなるのが、私たち教師の使命であると、この作品は語りかけているように思えてなりません。

道徳の教科化に伴う指導法と評価に関する研究

共同研究「道徳」研究員

物部典彦（早川小学校） 富田涼子（桜井小学校）

中村絵里（片浦小学校） 岸 靖（矢作小学校）

川上 貴（白鷗中学校） 片倉孝裕（国府津中学校）



1 はじめに

平成27年3月に文部科学省は学習指導要領の一部を改正し、従来の「道徳」を「特別の教科 道徳」として位置づけた。「特別の教科 道徳」の実施を小学校は平成30年度、中学校は平成31年度とし、教科書に基づく授業が行われるようになる。平成27年7月には、新たな学習指導要領解説も公開された。

そこで、教育指導の重点の1つとして「豊かな心の育成」を掲げる小田原市として、先進的に道徳教育の研究を進めることは意義あるものと考え、本研究を立ち上げた。

研究員は小学校4名、中学校2名の計6名で、5月に研究がスタートしたばかりである。研究を進める上での注意点として、次の2点について、研究員全員で確認した。

①疑問に思うことは、そのままにせずお互い出し合うこと。

②文部科学省等の最新情報を随時取り入れていくよう、アンテナを高くすること。

2 研究の目的

「特別の教科 道徳（道徳科）」の指導と評価について研究を深め、成果を発表することで、市内教員の指導力の向上を図る。

3 主な研究の内容

① 指導法について

小田原市として「考え、議論する道徳」とは、どのような授業なのかを明確にしていく。「考え」と「議論」を分けて考えて、適切な場を設定することが重要であると考え。「考え」とは自分の考えをしっかりと持つ場であ

り、「議論」とは、自分の考えを発信したり、他の考えの受信をしたりする場のことであると捉えている。この2つを授業に効果的に取り込む指導法や、「導入・展開・終末」の3段階に分けた授業構成、中心発問の設定の仕方、評価につながる振り返り等について研究を行い、研究発表会で提案できればと考えている。

② 評価について

文部科学省では、指導要録等の評価は、数値による評価ではなく、記述による評価としている。自分と異なる意見を理解し、多面的に考えようとしているか、資料等の内容を自分に置き換えて具体的に理解しようとしているかなどに注目するよう求められている。

子供一人一人が「いかに成長したか」を見取るために、学校における教育活動すべてにおいて子どもがどう過ごしてきたかを把握しなくてはならない。そのためには、日頃の児童生徒観察だけでなく、客観的な資料とするために、アンケート調査が有効ではないかと考える。

学習前と後の変容を客観的に見取ることのできるアンケート調査の作成やその活用方法等も探っていきたい。

4 おわりに

本研究は、まだ始まったばかりであるが、来年度の研究発表会では、小田原版「特別の教科 道徳 授業モデルおよび評価法」を示し、4月から授業を行う先生方の参考になるよう、研究に積極的に取り組んでいきたい。



「わからないんだけど」から深まる話し合い

教育指導課指導主事

堀 田 亜 衣



小学校3年の社会科の授業を参観した時のことです。地域の安全を守っている人の活動や施設の役割について、一人一人が調べたことをグループの友達に伝え、さらに「クラスみんなに知らせたい大事なことを話し合って決める場面でした。子供達は、地域の地図を囲みながら真剣に話し合っています。

グループの司会を務めていた子が「うちのグループは、(地図を指しながら)ここにある信号をみんなに知らせるっていい？」と話をまとめようとしたとき、「うーん。わからないんだけど。」と、A児がつぶやきました。A児が自分の考えを言おうかどうしようか迷っていると、司会は「正直に言っていよいよ。」と優しく発言を促しました。「正直に言うと、私はカーブミラーについて知らせたい。カーブミラーがあると、たくさんの人が気をつけてくれて安全になると思う。」と、A児は自分の考えを発言することができました。

私は、A児の「うーん。わからないんだけど。」という発言がとても素敵だと思いました。A児は、自信がなくて不安を感じながらも、話し合いのリーダーシップをとっている子の意見に流されず、自分の思いを言えたからです。A児が何か言いたそうにしている様子に気付いて、「正直に言ってもいいよ。」とA児の背中を押してあげた司会の発言にも温かさを感じました。

さらに、カーブミラーのよさに気づいていなかったB児は、「カーブミラーを選んだのはどういう理由なの。」とA児に問い返

しました。A児が「カーブミラーが付いているところって…」と説明しかけると、B児は「カーブのところだ。カーブの先は見えないけど、見えるようになるから安全なんだね。」とひらめいたように言いました。司会の子が「この地域はカーブが多いから、カーブミラーが安全を守っているということだね。」と言ってまとめると、B児も納得した表情で「いいと思う。」と賛成しました。話し合いを通して、A児もB児も「自分の考えを聞いてもらえてよかった。」「友達の考えを聞いて、自分では気付けなかったことに気付けてよかった。」という、伝え合い学び合うことのよさを感じることができたのではないのでしょうか。

この学級の子供達のように、友達の考えをよく聞き、自分の考えとはちがってもまずは受け止め、さらに自分の考えを再構成しようとする姿が見られるのは、日頃から担任の先生が話し方や聞き方を形式的に指導しているのではなく、子供達に「もっと知りたい」「みんなと一緒に考えたい」という学びへ向かう力を育てているからだと思います。

現在、国で検討が進められている学習指導要領改訂の方向性(案)において、「他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」の実現が、授業改善の視点として示されています。A児のように「うーん。わからないんだけど。」と自分の疑問を友達に投げかけることができるような力を育てていくことも必要だと感じた授業でした。



学習指導法研修会

～どの子も【分かる・できる】をめざした授業づくり～

教育指導課指導主事
綾 部 敏 信



1 はじめに

昨年度までは国語や算数・数学の学習指導法についての研修であったが、今年度は学校種や教科、教員の経験年数等に関係なく多くの教員対象となる研修にするため、標記の研修テーマとした。そこで、本研修のテーマに迫るために、今年度は「授業のユニバーサルデザイン」の考え方を取入れながらテーマに迫ることにした。(以下ユニバーサルデザイン＝UDとする)

2 第1回学習指導法研修会

実施日 平成28年6月30日(木)

場 所 小田原アリーナ大会議室

受講者 小学校25名、中学校11名

講 師 星槎大学大学院准教授

阿部 利彦 氏

3 研修の概要

(1) 教育のUDとは

より多くの子供達にとって分かりやすく、学びやすく配慮された教育のデザインである。

(2) 教育における3つのUD

①授業のUD化 ②教室環境のUD化

③人的環境のUD化

(3) 授業のUD化3本柱(「視覚化」「焦点化」「共有化」)に基づく5つのテクニック

①「ひきつける」(視覚化)

- ・教室前面の掲示物を少なくし、余計な視覚情報を減らす。
- ・一度に扱う子供の考えは1つだけにする。一度に多くの情報を与えられても処理できない。
- ・1つの考えを深く解釈することで自分

の考えとの相違点や類似点を意識することができる。

②「むすびつける」(視覚化・焦点化)

- ・子供の関心がある分野、得意な分野にむすびつける。
- ・既習事項や子供が知っていることとむすびつける。
- ・子供が発した言葉を使ってむすびつける。

③「方向づける」(焦点化)

- ・子供を「とまどわせない」ということである。「考えること」、「悩むことと」、「とまどうこと」は違う。
- ・子供の「まちがいは宝の山。誤答が現れたからこそ可能となる学びがある。

④「そろえる」(共有化)

- ・「おいて行かれる」子供を作らないよう皆の理解をそろえる工夫をすること。
- ・「そろえる」ための雰囲気づくり→「わからない」「できない」に正直になれるクラス。

⑤「わかった」と実感させる

- ・「自分の力でやり遂げた」と感じさせる。
- ・達成できたことについて仲間に認めてもらう機会をつくる。
- ・学習したことを活かすチャンスをつくる。

※第2回研修会は小中学校別に本テーマに沿った授業研究を行います。

・小学校 平成28年11月21日(月)

授業者 酒匂小 森 雄大 教諭

・中学校 平成28年11月18日(金)

授業者 橘中 新居田 薫 教諭



初任者研修会

～自分を信じて、夢を持ち続ける教師に～

教育指導課指導主事

北村 しのぶ

「児童生徒指導、授業力向上について研修を深めることで、小田原市立小・中学校教員としての自覚を高め、今後の教育活動に活かすこと」を目的とした小田原市初任者研修会を、平成28年8月22日（月）に尊徳記念館で実施しました。今年度の初任者研修会は、小学校24名、中学校16名、計40名の先生方が受講しました。

当日は、先輩の実践発表として、報徳小学校、剣持明日香教諭と、白山中学校、山本さやか教諭を迎え、「教科指導・児童生徒指導で大切にしていること」をテーマとした実践発表をしていただきました。お2人の先生とも、初任者だった頃から現在に至るまでの体験談や、これまでの経験から、子供達と向き合い日々実践している上で大切にしていること、初任者の先生方への伝えたいこと等、終始笑顔で発表されました。

その後、小・中学校にわかれ、実践発表を聞いて感じたことや9月からの指導で力を入れていきたいことについて、グループ協議を行いました。グループ協議には剣持教諭と山本教諭にもご参加いただき、協議の中で出た日頃の児童生徒指導や授業について、アドバイスをしていただきました。最後に研修相談員からまとめの話をして閉会となりました。



初任者の先生方の振り返りシートには、「先輩方の話を聞き、失敗や不安は自分だけではないのだと感じた。」「今、自分にできることを一生懸命やりたい。」「子供のよいところに目を向け、良いところをしっかりとほめることがいかに大切かわかった。」「学級経営は集団を育て、その中で子供達を成長させることを心がけていきたい。」等これまでの自分の振り返りと、これからの具体的な目標が書かれていました。

初任者は教師1年目ではありますが、子供達にとっては年齢や経験に関係なく、誰もが同じ「先生」です。教育のプロとして、志を高く持つとともに、小田原市の教育指導の重点のひとつ「教職員の資質・指導力の向上」に掲げている「子供を見捨てない先生」「子供ありきの先生」として、目の前の子供達に寄り添っていただけたらと思います。



研究所だより⑤



平成28年度 教育講演会 すべての子が同じ教室で学ぶ幸せ

前 大阪市立大空小学校 校長 木村 泰子 氏

平成28年度の教育講演会に、前大阪市立大空小学校長の木村泰子氏をお迎えし、「すべての子が同じ教室で学ぶ幸せ」という演題でご講演いただきました。

木村氏は、「水が怖く小学校の1年生から5年生の5年間まったくプールに入らず、6年生で唯一泳げない子だった。ある日上を向いて泳ぐことを教えられると、泳げた。この上を向いたら泳げるという成功体験が、背泳ぎの選手として活躍するほどの力になった。」そうです。そして、このことから、「学習障がいのある子、勉強するのが苦しいと感じている子等は、有意義な人生を送る可能性をもっている子供であると考えようになった。」とのことでした。ご自身の体験をふまえたお話から始まった講演からは、木村氏の熱い思いが伝わってきました。

「みんなの学校」 ダイジェスト版より

＜音楽会のオーディション＞

ライバルでも教えあう、高めあうことが当たり前、喜ぶこと、悔しがること、友達を称えられることは、全力をだしてこそ意味がある。

相手を負かすのではなく、努力して自分に勝つことを教える。

＜転校して来た保護者の言葉＞

「みんなと同じ時間学校に通い続けている。」

「1時間目～6時間目まで学校にいて、夜は疲れて寝る。これがこの子の本当の姿なのかな」

「鉛筆がすり減っているだけでもうれしい。ちょっとしたことだが…」

大空小の授業の目的

- ・自分を大切にする力を育てる
- ・自分の考えをもつ力を育てる
- ・自分を表現したりチャレンジしたりする力を育てる

＜以前の子供達は＞

- ・自分がサボっていること、集中できないことを人のせいにしていた。
- ・自分が学ぶのに「となりの子がうるさい」「じゃまする」「先生の教え方が悪い」と周りのせいにしていた。

＜教師が感じていたこと＞

- ・知的障がい、身体的障がい等がある子をわけて授業をおこなうと、「どうせ、俺らとは違う人間や」と考える子供達が大人になった時、この空気で社会を作る。
- ・障がいがあるという理由だけで子供達の関係を絶つのはよくないのではないか。



障がいは個性です。

個性は伸ばすもの。

個性を、その子が欠けた点、欠点だ、短所だと思わせるような教育をしていないか。障がいを個性として長所とするには、周りの子を育てる。

1人の子供を全職員で育てよう。

- ・10年先に生きる力を育てる。(学力を保障するのは過去の学校になる)
- ・子供の前にいる先生としての自分は、人として子供と対等に学び合っているか、学び合う人として自分が子供の前にいるか。
- ・教える専門家から学びの専門家へ「常に子供に学ぶ自分でいよう」。
- ・自分にはないものは人の力を活用する。
- ・授業を1人で行うのではなくオープンに開く。
- ・その子が安心して学べる。「わからない」と安心して言えるようにする。



マナーアップ研修会



接遇マナー、接遇のためのコミュニケーションについて考え、それらを身につけることを通して、教職員、社会人としての資質を高め、実践力の向上を図ることを目的に実施しているマナーアップ研修会は、今年で3年目を迎えました。各学校の代表者による「マナーアップ研修Ⅰ」の後、各学校で実施している「マナーアップ研修Ⅱ」の成果と課題についてまとめたものをお伝えします。今後もマナーアップについての意識が定着するよう、さらに研修の充実をめざしていきます



マナーアップ研修会Ⅰ

＜成果＞

- ・私たちの職業も、人に接する仕事なので、おもてなしの心を大切にしていくことの大切さを改めて感じることができた。
- ・相手に、ただ「こんにちは」といったあいさつをするだけでなく、日常の様子などを一言添えることによって好感をもたれるというのは確かである。どんな言葉をかけたらよいか考え、実践することができた。
- ・保護者をはじめとする来校者への対応について、ホスピタリティの精神と、身だしなみや表情、姿勢、態度等の重要性について、再確認することのできる研修となった。

＜課題＞

- ・学校への来客を考えたとき、誰がどのような用件でみえたのか、どう接客するのか、またいろいろな状況下での保護者からの要求や電話に十分対応ができるのかなど、不安が残る。即座に対応できるマナーを今後も研修していく必要がある。
- ・演習の中で、こういう時はどう対応したらよいか等の話も出ていた。若い職員も多いので、具体的な対応の仕方を今後も確認していくことが大切である。
- ・具体的な場面を設定していくことで解決策を探っていけるようなスキルを身につけていきたい。

見る、感じる、学ぶ、やってみる！

～今後の教育研究所事業を紹介します～

◇共同研究「児童生徒の読書に関する研究」公開研究会

内容	期日	授業者
平成27・28年度 2年間の研究の成果を発表する。 授業公開 「詩のボクシングにチャレンジしよう」(仮)	12月8日(木)	白山中学校 土井 智香子 教諭

◇おだわら未来学舎 「教職員としての実践力をみがき、教育への情熱を高める」

回	内容・講師	期日	場所
第3回	『これからの支援教育について』(仮) 星槎大学大学院 准教授 阿部 利彦 先生	11月18日(金)	小田原市役所 大会議室
第4回	『企業のトップが語る未来学舎 ～人を大切にしたい経営理念～』(仮) ヤマトホールディング株式会社 取締役相談役 瀬戸 薫 氏	平成29年 1月13日(金)	小田原市役所 大会議室

小田原教育 第125号 発行日 平成28年10月21日 発行者 教育研究所長 柳下 正祐
発行所 小田原市教育研究所 〒250-8555 小田原市荻窪 300 番地 TEL0465-33-1730

